

無限性と無限界性のあいだ

——最初期アドルノによるカント・フロイト評価——

西 欣 也

はじめに

弱冠二三歳のテオドル・ヴィーゼンブルントが「超越論的心理学における無意識の概念」と題された論文を用意したのは、一九二七年のことであった。これにより彼は、大学私講師としての教授資格を得る計画であったが、翌一九二八年一月一日に、この資格申請は撤回される。そしてこの論文は、彼がやがて母方の姓アドルノを名乗り、著名になって後も、出版されることはなかった。

このときのいきさつについては、あまり詳細な事情は知られていないし、問題の論文をめぐっても、いくつかの簡単な位置づけのみが語られてきた。アドルノの死後初めて世に出されるこの稿をいち早く読むことのできたマーティン・ジェイは、「アドルノの指導教官であった」H・コルネリウスの超越論的現象学に精神分析を結びつけた長大な「論考」⁽¹⁾「師の異端的新カント主義とマルクス主義との共立可能性のみか、この両者と（中略）精神分析との共立可能性をも見出そうとするもの」⁽²⁾といった簡潔な紹介をしながら、マルクス主義に懐疑的なコルネリウスの反対によって資格申請が取り下げられたエピソードを伝えている。一方、八〇年代の終わりにアドルノの伝記を著したハルトムト・シャイブレは、アドルノと師との見解の相違のみでなく、両者の立場の極度の類似にも注目している。当時コル

ネリウスが他の認定委員たちに書き送ったところによると、このアドルノの論文は、「多くの言葉で飾りたてられているにせよ、コルネリウス自身の著作の単純な反復」に過ぎぬものとされているからである。もつとも、コルネリウスはその際、精神分析をめぐる終章をまだ読んでいないと付け加えることで、最終的な評価を保留したのであった。そこでシャイブレは、コルネリウスが黙殺したアドルノの新たな社会志向（それはマーティン・ジェイが「マルクス主義的」側面と呼んだものには重要なであろう）に積極的な意義を認め、この論文をへ超越論哲学からイデオロギー批判への移行の兆しと読んでいる。

ジェイとシャイブレの解説に共通しているのは、アドルノの打ち出した哲学的イデオロギー批判という新機軸が指導教授の政治的立場からまだ十分に受け入れられず、この無理解が災いしてアドルノは別のテーマに転じざるを得なかったという憶測である。そうしてこの推断は、更にもう一つの、ごく自然な前提に依拠しているように思える。それは、アドルノやその同僚であったホルクハイマーが、政治的に未熟な学生時代から後の倫理的模範像へ、つまり「アウシュビッツ以降、詩を書くことは野蛮である」等の発言で知られるリベラルな知識人像へと移行する線上での、社会的関心の萌芽といった筋書である。なるほど、「超越論的心理学における無意識の概念」は、哲学テクストの読解をイデオロギー批判へと接続するアドルノ独特のスタイルを形成する上で、重要な一歩となったと見て差し支えないだろう。カント哲学とフロイト精神分析とを対照させることで得た帰結を歴史的現実との関係で論じるアドルノの口調は、新たな学問的展望に鼓舞され潑刺としているし、実際に後年『否定弁証法』でのカント論や、フロイト理論を用いたファシズム研究において、この可能性は具体化されていると見ることも可能である。だがそれにも拘わらず、この教授資格論文の段階では、原理的考察が政治的イデオロギー批判に適用される可能性を論じた箇所は、二〇〇頁を越える本文のうちわずか二、三頁に制限されていることに注意しなければならない。その展望は最終考察の中で示唆されているに過ぎず、ジェイのいう「マルクス主義的帰結」といったものとはほど遠い、ごく控えめなものである。

つまりアドルノは、カントおよびフロイトをめぐる批判的検討の理論的気密性を十分に高めた上で、その問題構成内部でのみ、社会批判の可能性を示そうとしているかに見えるのである。そうであるとすれば、シャイブレの「超越論哲学からイデオロギー批判への移行」といった単純な要約にも、制限が付されねばなるまい。実際には、哲学的批判とイデオロギー分析とは、別段移行されるべき前後関係の両極にあったわけではなく、あたかも超越論的方法論を追究すれば自ずとイデオロギー批判が可能になるかの如くに、考えられているのだから。

したがって我々としては、カントとフロイトをめぐるアドルノの哲学的思索に、社会批判への関心を外から押し当てる解釈を極力回避しつつ最初期アドルノの構想を検討してゆくことを、本論の主要な方針としよう。言い換えるならば、この方針は、ファシズムの糾弾に代表される規範的知識人像から遡って初期草稿を読み解くのでなく、そうした先入見を一旦括弧に入れた上で、若きアドルノの思考を原理的レヴェルで受けとめ、これとイデオロギー批判との内的連関の可能性を吟味し直すことを目論むものである。無論、三〇年代以降のアドルノの批判的実践が、常に最初期の展望に忠実であったとも限らない。現に、やがて彼がファシズムやジャズを論難する際、フロイト理論の援用に安易な面がなかったと主張することは今や困難であるし、そうした主張に拘泥する必要もあるまい。だが、かといってこの欠陥から、二〇年代に早くも精神分析の認識論的意義を探ろうとしたアドルノの意図までも斥けるのは、性急であろう。これらに対し、彼の最初期の構想を論理的に明確化することにより、我々の考察は、彼の学際的野心を否定することなく、当初の正当性を現時点から再考するための指針を与えるのである。もっとも、こうした出発点における彼の問題設定が正当であった場合、それが後にどのような仕方でも有効性を失っていったかという点を逐一検証して行く作業は、別の機会にゆずらねばなるまいが。

以下の考察においては、まず「超越論的心理学における無意識の概念」における方法的原理を再構成することが試みられる。アドルノの本格的な思索活動は三〇年代に開始されたとするのが定説であるから、一九二七年のこの論考

は、立ち入って解説しておくだけの意義をもつはずである。ただし我々の議論は、今まで注目されることのなかった若きアドルノの思想を紹介し再評価するといった目的にのみ仕えるのではない。むしろ、彼の理論展開を人間関係上の図式から解放し、認識論的問題構成の枠に据え直すことで、彼の思想を押し広げてゆくだけの新たな立脚点を整えることこそ、我々の作業の目指すところである。それゆえ本稿では、この長大な論考をその構成に即して詳細に検証するのでなく、論理のエッセンスを、特に限界概念の機能に着目しつつ抽出することに重点を置きたい。先述したように、彼の方法的原理そのものが十分に明確化されるならば、そこから展開される社会批判の可能性や精神分析解釈の妥当性は、自ずと明らかになるのであるから。

一 コルネリウスの認識論

アドルノの師であったハンス・コルネリウスが「超越論的心理学における無意識の概念」を自らの理説の単純な反復と見なしていた事実については、既に触れた。このハンス・コルネリウス（一八六三—一九四七）を今日最も有名にしているのは、エルンスト・マッハの忠実な弟子としての彼に向けられたレーニンの批判であろう。⁽⁴⁾ただ、マーティン・ジェイによるコルネリウス哲学の記述が「超越論的現象学」「異端的カント主義」と様々であることから予想される通り、彼は単なるマッハ主義の枠に収まりきらぬ多様かつ独自の考察を展開しており、その成果は主著『超越論的体系学』（一九一六）や『純粹理性批判』のコメントール（一九二六）において読まれる。アドルノは一九二一年の大学入学以来、彼に師事していたが、カント哲学については既に一五歳の時から、ジークフリート・クラカウアーによって手ほどきを受けていた。⁽⁵⁾もっとも、クラカウアーの場合に比して、コルネリウスのカント解釈が特にアドルノの共感を惹いたことは、アドルノ晩年のカント講義（一九五九）での好意的言及などからも窺うことができる。⁽⁶⁾教授資格申請論文の段階でも、コルネリウスの著作が全ての議論の前提であること、また明示されずとも彼の著作と同

じ意図の下に考察がなされていることが序文で予告され、本文で『超越論的体系学』や『哲学入門』（一九〇三）、『純粹理性批判』注釈』が随時参照されている。しかもアドルノは、先行するカント解釈としてはコルネリウスにのみ依拠しているのであるから、この論文がコルネリウスの拙い模倣と見なされるのも無理もないかも知れない。だが、アドルノの主眼がコルネリウスとは若干異なつた点に置かれていることは、この長大な論文の構成を概観してみただけでも自ずと明らかにならう。序文と結論部に挟まれた本文は三章から成り、まず無意識概念をめぐる問題の所在が明らかにされた後、第二章ではカント哲学の批判的検討を経てこの概念が練り上げられ、更に第三章でその帰結が精神分析の手法と重ね合わされる。方法論上の要である超越論的分析の吟味にあたっては、ほぼ全面的にコルネリウスの著作に依拠しているものの、一貫した主題をなすのは、カント解釈よりは無意識概念の可能性の模索である。加えて、そこで取り沙汰される無意識の概念は、狭義の心理学的術語ではなく、意識一般を考慮する際に哲学が陥りがちな或る種の誤謬を特徴づけるための独自のキーワードとして与えられているし、この概念を手がかりとしてベルクソン哲学や現象学に具体的批判の目を向けるといったオリジナナルな考察も見受けられる。明らかに、アドルノの視界に浮かんでいたのは、単にコルネリウスの反復という以上のものなのである。とりわけ、当時「その多くの帰結において未だ評価も定まらぬ幼い学問分野」であつた精神分析を採り上げたことに関し、彼がことさらに自己を正当化していることから推測されるように、精神分析の認識論的側面に着目するという斬新な試みは、若いアドルノの自負するところでもあつたらうし、また冒険でもあつたはずである。この点を考慮するならば、あるいはアドルノが模倣と取られかねないほどにコルネリウスの立場を踏襲したのも、その可能性をコルネリウス以上に引き出すためであり、これに成功するならば、精神分析のような新しい学説の評価にも大いに貢献することを示そうとしたためであつたとも考えられる。もっともアドルノは、こうした提案に対する無理解を予知してか、あるいはその達成度に自ら疑問を抱いたためか、この論文によっては正式に教授資格を申請せず、コルネリウスに私的に評価を打診してみるだけの周

到さを見せている。そしてその後の顛末については、我々には申請撤回の事実と先述の手紙が残されているのみである。

さてそれでは、アドルノの議論の前提となったコルネリウスの超越論的認識理論とはどのようなものであったのか。それは、意識の持つ「或る最も普遍的な連関」(138)を分析することにより、全ての経験の可能性の条件を考究する理説であったと言える。その際の〈連関 Zusanmenhang〉の強調は、物質を感覚の連関に基礎づけるマツハ主義からの影響を刻印していると言えようか。注意すべきは、連関とはいっても、コルネリウスのいう意識の連関は、静態的な関係性ではなく、新たな意識経験が獲得されるに依じてこれが過去の経験の総体との関わりの中で捉えられてゆくという、経験的時間のダイナミクスを含意しているという点である。そしてこのような意識経験の〈進展〉を考慮することで、全ての経験の可能性の条件すなわちカントのいう意味での超越論的条件が新たに踏査されるのである。その顕著な帰結は、「我々の生のあらゆる瞬間は、過去の体験の全てによって影響を受けている。つまり(概して気付かれない)我々の下準備の要素として、過去の全ての経験が後々まで作用している」(138)というものである。つまり、或る時点での意識とそれと与えられるものとの関係は、意識が過去の体験全体の中へ新たな経験を取り込みつつ意味づけてゆく構成作業として理解されるのである。意識〈連関〉への統合と経験の時間内的〈進展〉というこの二契機は、コルネリウス(及びアドルノ)による超越論的条件の再検討において特に重要なものであった。例えばこうした視点に立つとき、〈直接所与〉といったものも、その都度の現在として体験される時間と切り離して考えることはできない。言い換えれば、直接所与は、個人の意識における過去の経験に新たに組み込まれることで初めて意識されている以上、既に直接的ではなく、過去経験の総体によって媒介された対象と考えられねばならないのである(193)。

過去との連関に基づいて現在の認識が成立するというこの考え方はもともとでもあるにしても、一方で我々の現在の意識に過去経験の総体が常に現前しているわけではないことも、容易に気付かれるであろう。コルネリウスとアドル

ノの説明において注意しておかなければならないのは、意識連関が、隠れた関係性として捉えられている点である。コルネリウスは、「我々の個別体験を意識連関の全体性に組み込む必然的形式」を「想起 Erinnerung」と呼ぶ。言うまでもなく、ここでいう「想起」は、単に過去に体験された個別的事象を意識の内に再生することではない。そのような明確な対象想起ではなしに、「気付かれていない想起 (eine unbemerkte Erinnerung)」が問題とされているのである。この点を説明するために、音楽のメロディにおける音の移行が挙げられている。ドからラへと音が移行した場合、もはやドの音が現存しなくとも、ラの音はドの影響を受けているため、レやファに続いた場合とは違った仕方である。これは、既に鳴っていないドの音が気付かれないかたちで想起されているからであって、ドとラの〈連関〉が聴く者の意識において統一されているからである。経験的意識における現在は、こうした自覚されない連想や予測の結合の中でのみ意味を見出しており、この結合のプロセスが想起と呼ばれるのである。それゆえ、想起とは「それを通して他の体験が間接的に我々に与えられているような体験、もしくは合法的連関に組み込まれることで、他の体験の間接的所与を与えるような体験、そうした全ての体験のための規則」(283)である。想起が「気付かれぬ」ものでありながら、かつ「規則」として、つまり関係における或る必然性をもって作用する点が、ここでは見逃せない。この規則に知らず知らずの内に規制されながら、我々の意識は新たな体験を体験間の連関に位置づけている、というわけだ。

二 「無意識的なものの哲学」の危険性

以上の論点に関して、アドルノはコルネリウスの考察をほぼ完全に踏襲している。その上で、アドルノは無意識の概念を自らの議論の主題として展開してゆくわけであるが、その際にまず彼は、無意識を理論的に措定する際の或る困難をとり上げる。その困難とは、無意識の事象が意識経験を超越しているか、あるいはこれに内在しているかを容

易に決定できない、というものである。「無意識についての理説はすべて、無意識を常に何とかして一つの状態として受け取るのであるが、この状態とは、意識の枠内で見出されるものだ」(20)からである。つまり無意識概念は、〈意識されぬもの〉と見なされているにも拘わらず、実際はそう見なされた経験対象として意識に内在していなければならないのであって、この両義性が、無意識概念の規定を著しく困難にしているのである。この困難を前にして、アドルノは明らかにコルネリウスに沿った姿勢を表明している。すなわち、あらゆる意識経験を統一的意識連関の内部でのみ意味づけようとしたコルネリウスに倣って、アドルノは無意識を単純に意識の外に置かれたものと見なすことを斥けるのである。

……無意識事象に適した独自の認識方法を無意識的事実のために定めるといふ不可避的な回答をするにせよ、あるいはそもそも無意識事象一般を捉えることをすっかりあきらめてしまふにせよ、以下の点には何ら変わりがない。つまり、無意識的事象は、意識に内在するものとして理解される、という点である。(20 f)

読まれる通り、アドルノは、無意識概念が意識の外部に超越的に据えられることを否定する内在的立場に留まろうとする。経験的意識から独立した無意識を抽象的に想定するとき、無意識論は、無意識概念をめぐる「独断論 Dogmatik」ないし「神秘論 Mystik」のような、形而上学的な思弁へと後退せざるを得ない。こうした無意識概念の形而上学化に対して内在的批判を加えることが、さしあつたのアドルノの方針となるわけである。⁽⁹⁾

ところで、経験的意識を離れた無意識概念の超越的使用を戒めるこうした姿勢は、マッハからコルネリウスへと引き継がれた経験主義の流れを汲むものであると同時に、独断論的誤謬に異議を唱える点で、カントの超越論的批判に通じている。現にアドルノは、認識の構造においてこの独断論的傾向を助長する哲学的議論の伝統を「無意識的なものの哲学」と命名し、それらに対して、カントを思わせる広範な認識論的批判を敢行している。例えば、ベルクソンに代表される「直観 Intuition」の概念は、感性的経験を越えて対象に直接至る手段として有用であるかに見える。だ

がアドルノによれば、直観概念は「経験心理学的研究の成果と生氣論的な（中略）無意識の形而上学とを一致させようとする試みの中で形成されて」（126）いるに過ぎない。その「形而上学」的性格は、さきの無意識概念の場合と同じ両義性を無視する態度に表れている。なぜなら、直観を承認しようとするれば、「それ自体が意識的な構成に即して理解されない、ような認識が、意識に与えられている」（epc）と考えざるを得ないのだが、そのように「全く意識されないもの das schlechthin Unbewusste」は、決して認識され得ないはずだからである。同様に、フッサールの現象学においても、経験の限界を超えた領分が実体化される独断論的誤りが指摘されている。つまり、フッサールの方法は、「カント的限界概念を奇妙な仕方で解釈し、完全に知られている内在的な物自体を現象の超越的根拠と同一視して」しまっている。このため、フッサール流の「無意識的なものの哲学にとっては、無意識的なものがまさしく、意識固有の内在的構成を通り過ぎて、経験の超越的絶対的根拠となっている」（121）のである。

ベルクソンやフッサールに対するこうした批判において明らかであるように、アドルノが無意識の概念に取り組む場合に焦点となるのは、心理学よりもむしろ認識批判の問題、とりわけ経験的認識の限界をめぐる概念の精緻化の問題である。すなわち、経験を越えた領域（カントにおける「物自体」のような）をあたかも実在物であるかのように捉え使用する過ちを警戒すべく、アドルノは、無意識概念を利用して或る種の危険性を提示しているのである。意識との関係において無意識の概念が措定され、それぞれの概念が一人歩きを始めれば、いとも容易に両者は対立するものと見なされ、無意識は意識を離れた、独自の領域として扱われてしまう。このような無批判な認識態勢に抗してアドルノは断固として内在的立場を保持するわけであるが、執拗な誤謬を回避すべく彼が一層慎重に言葉を選ぶとき、その無意識概念は必然的に「ポジティブでない」性格を与えられることに注目しておきたい。

ここで我々の批判的考察を無意識概念に関係づけてくれるような普遍性にあつては、無意識概念はそれ自体ポジティブには規定されない。ただ意識の否定として規定されるのみである。それだから、無意識概念は必然的に、

意識概念と全く同様に、漠然としたものとなる。(118)

無意識は、意識と無意識の境界線の向こう側、意識の限界の向こう側にあると想定されがちであるにもかかわらず、この境界線の向こう側も、実は意識された限りで認識されている。この限界をめぐるジレンマは、無意識の概念を、意識の概念ともども、曖昧な輪郭を持ったものにしてている。意識に対立する固有の領域でなく端的に意識の否定 Negation でしかないような、すなわち決してポジティブであり得ないような不確実な領域が、意識の輪郭となるからである。この「ポジティブでない」という語法は、限界概念の設定において繰り返し生じる誤謬に対して、アドルノが内在的批判の立場を確保しようとする場面を示す明確な指標となる。例えば、同様に超越的概念の主張を否定する要請は、次のようにも言い換えられる。

無意識が原理的に全く超越的に据えられている限り、無意識の概念は獲得され得ないのだということ、このことを〔我々の〕批判は明らかにしたのであるから、当の絶対的に無意識的なものについてポジティブに主張することはすべて、無効になる。そうした主張はすべて、認識できないものを知ることを前提しているのである。(128)

「認識できないものを知ること Kennnis eines Unerkennbaren」とは一つの実体化であり、あの無意識概念の含む両義性を自覚することなしに、意識を越えた対象を知り得ると信じていることである。この実体化を経験的認識の内在の側から棄却するアドルノの批判は、先程触れたように、カントの超越論的批判にも重なる意図に拠っていたが、しかしもちろん、アドルノの内在批判はカントの方法と悉く同じものというわけではない。それどころかアドルノは、カントの批判を一層徹底させることで、カント自身の問題点を探り出す試みをも示唆している。先の文章にすぐ続いて、彼は次のように述べる。

無意識を我々に保証するには、直観は原理的に不十分であることが証明されたが、この証明に即すならば、絶対的に超越的な無意識 *das absolut transzendente Unbewusste* といったものは全く不十分なのであって、そうした

無意識がそもそも存在するかのよう主張する余地は絶対ない。カントの体系においても全く同様に（彼が想起されるのは謂れないことではないのだが）、超越論的弁証論でのカントの批判を一貫して追求するならば、超越的な物自体 *ein transzendentes Ding an sich* を主張する余地はない。ある対象について陳述する場合、対象自身が認識されないことを前提してしまふようであれば、そうした陳述はすべて、はじめから矛盾しているのだ。
(128 f.)

物自体が超越的に主張されてはならないということ、少なくともこの主張に関しては、カントも異論を差し挟みはしまい。超越的な物自体を認識することは、現象の領域を不当に拡大することと同じだからである。カントの解決法からアドルノが微妙に離れようとしていることが窺えるのは、認識され得ない対象についての「陳述 (Aussage ≡ 命題)」一般の内に矛盾が含まれていることを喚起する点においてである。なるほど『純粹理性批判』においても、「一見これと同様に、「現象の根底にある物自体については何事も語り得ない」⁽⁹⁾ことが明言されてはいる。しかしカントが物自体を「可感的存在 *Nomena*」と呼び、この「可感的存在」という概念、つまり感性の対象としてではなく物自体として（純粹概念によって）考えられるようなものの概念は、少なくとも「自己矛盾を含んでいな⁽¹⁰⁾」(KrV30)と書くのを見るとき、アドルノの立場との相違は幾分鮮明になる。可想界という限界概念を想定することがカントにおいては矛盾の解消に通じるのに対し、アドルノにおいては認識され得ない対象という前提そのものが矛盾しているかに見えるのである。一言でいえば、アドルノの方が一層経験内在的な立場に徹しているようである。こうした一貫性は、経験主義の内在性を徹底させた自然な帰結であろうから、アドルノが次のように懸念したであろうことは、想像に難くない。可感的存在という構想の内包する両義性が忘れ去られ、感性的存在と可感的存在とが截然と分かれてしまふと、可感的存在のポジティブな規定が不当に超越的な性質を帯びるのではないか。そしてひとたび経験から独立した超越的領域が認められてしまえば、無意識概念と同じ神秘化が容易に遂行されるであろう。その結果カントに

おける当初の超越論的批判は次第に超越的主張へと反転してゆきはしまいか。そして事実、これがカント以降、「無意識的なものの哲学」の辿った道筋であったと、アドルノは考えていたようである。

無意識的な可想的性格 *der unbewußte intelligible Charakter* という概念も、心理的超越的な物自体の概念にしても、またあらゆる現象の無意識的根拠としての〈生命 *Leben*〉や、とりわけ自発性 *Spontaneität* の概念にしても、我々がカントの限界概念を実体化するものとして特徴づけたそれらの諸概念はすべて、超越論的哲学における超越論的条件と全く同じ仕方、ショーペンハウアーからベルクソンに至る無意識的なものの哲学によって、逸れることなく一貫して、主張されてきた。(132)

物自体に関係する可想的存在や「生命」、「自発性」といったカントの諸概念は、現象から独立した存在を「無意識的なものの哲学」が実体化する口実を与えてしまった、というのである。しかしながら、可想的存在をこれほど徹底して否定してしまうアドルノの立場は、見方を変えれば、一種の不可知論に陥った相対主義的経験論に過ぎぬとも取れる。彼の議論の剛直さは、カント自身の問題点を探るところか、レーニンが一笑に付したマッハ主義の悪しき観念論を継承する、経験一元論に過ぎぬのではないか。認識し得ない対象の認識不可能性に執着するよりも、(カントがそうしたように)本来語り得ない領域を確定することで、より堅固な哲学体系を構築する方が有益ではなかったろうか。

三 限界概念の認識論的機能

既に見たように、アドルノは、超越的に措定された対象を常に「ポジティブでない」ものに保とうとした。これに対してカントは、可想的存在の想定が自己矛盾を含まないと述べたとき、この可想的なものをポジティブに実体化してしまっていたのであろうか。否、周知のようにカントは、可想的存在が決してポジティブな意味に取られてはなら

ず、「全くネガティブな意味での可想的存在と解されねばならない」(KrV309)ことを、はっきりと語っている。加えて、この可想的存在は「限界概念」に過ぎないのだから、感性的存在を「制限する」目的でしか使用されないのだと説明している。明らかに、この論理的要請は、無意識が意識の「否定」としてのみ規定されるとするアドルノのそれと、同じ批判的意図に基づくものである。ならば逆に、アドルノとカントの姿勢の微妙な差異は、可想的存在という〈限界概念〉に両者がどのような性質を与えているか、換言すれば、経験的領域と超越的領域とを媒介する一点となるその概念に彼らがいかなる機能を演じさせたかという点において、明確に分節化されるのではないか。

カントが、「可想的存在はネガティブなものとしてしか理解されない」としながらも、「自己矛盾を含まず」にその概念を提示しようと考えた理由は、「感性的認識の客観的实在性に制限を加えるために必要」(KrV310)だからであった。感性的存在が存在の全てではない以上、この領域の外に、たとえ「空虚な」ものであれ、これと区別されるもう一つの領域を想定することは避けられない。むしろ、この存在領域は無矛盾の概念として「思惟」されることが必要だ、というわけである。

一方、アドルノにおいては、純粹に超経験的なものの領域は、あくまで「はじめから矛盾している」。ここでくれぐれも注意すべきは、アドルノはなにも、可想的領域など存在しないと主張しているのではない、という点である。ただ彼の説明を注意深く読めば見て取れるように、ここでは経験の彼岸を指示する概念そのものが、超経験的な領域の指標である事実と、それが経験的意識においてはじめて機能するという事実との間で分裂ないし矛盾を内包したものとして、意識されているのである。このことは、無意識概念を両義的なままに、また意識と無意識との境界を曖昧なままに保っていた先の記述において、我々の確認してきたところでもある。カントが命名した幾つかの概念の問題点は、それらがポジティブに受け取られることで、限界概念そのものの矛盾がともすると忘れられてしまうことにあったのではないか。「物自体」の領分や「可想的世界」についても、それらは本来、現象や感性的世界に対する制限

として構想されていたのであるから、(カントが本来望んだように) 制限としてのみ使用されれば十分であるはずだ。現象でない両義的部分、感性的でない不確定の世界を残しておけば十分、現象を制限することは可能ではないか、そう言わんばかりに、アドルノは、超経験的領域がポジティブであってはならないことを執拗に強調したのだった。その場合アドルノが徹底して否定したのは、可想的存在そのものではなく、そのポジティブな認識態勢なのであって、その意味で言えば、彼は物自体を否定して内在的立場を一元化しているのではなく、限界の認識に伴う矛盾への視点を維持する立場を貫いていると見るべきなのである。

彼がこのように超経験的な概念の矛盾に固執するのは、カントが当初「空虚な」ものとして残した領域をどこまでも空虚なまま留め、限界概念が経験の超越と内在との間で刻む分裂をカント以上に一貫して記憶し続ける配慮の表れであったと言えることができる。カント以上に、というのは、アドルノに言わせるならば明らかに、カントのこの点での配慮は十分ではなかったからである。ただし、カントの哲学体系において、この矛盾と同型的な論理がはつきりと姿を現す場があったと、アドルノは考えていた。超越論的弁証論におけるアンチノミー論がそれである。先に引用した箇所でも、物自体の超越的主張を戒めるために弁証論が引き合いに出されていたし、また無意識概念の両義性がカントの示したアンチノミーをモデルとしていることは「無意識的なものの形而上学のアンチノミー論」(22)といった表現からも理解できる。経験の意識の外なる無意識については、ポジティブに有るか無いかを決定できないというわけである。にもかかわらず、カントはアンチノミー論で捉えられていたこの矛盾を離れてしばしば「可想界への逸脱 *Ausbrechen in intelligible Welten*」を犯したと、アドルノは言う。感性的領域が全てではないと知るカントは、制限された感性的領域に対して無制約な超感性的領域を対置し(かつ後者の認識可能性を否定し)たのであった。しかし、二つの排他的領域を設定すれば、対時関係から両者が実体化される危険が常につきまとう。事実、カントは、もともとネガティブなものではなかった可想的存在から「自由」や「自発性」の理説を展開し、とりわけ『実践理

性批判』においては、超感性的世界は既に独立した自明の考察領域となつてゐる。可想的存在に關わりつつ經驗の限界に現れる「自由」や「自発性」のような諸々の概念は、アドルノの目には、カントの構想において既に物自体の概念と同様「アンチノミー論に従属する」(二〇)ものと映るにもかかわらず。⁽¹⁾

もっとも、「カント以上に」という我々の記述は、カントとアドルノの限界概念の差異を、単に量的な反省度の差へと還元してしまいかねない。むしろ我々は、矛盾に対するアドルノの配慮の特異性を更に注視すべきであろう。実際は、超越化に対する危惧という点では両者とも万全を期しているにせよ、アドルノの問題状況は、或る逆説によつて彩られていることを指摘できるからである。実体化の危険をアドルノに意識させ続けたのは、何よりも、言語による「陳述」一般に対する、いわば即物的な把握態勢であつたのではないか。すなわち、語によつて徴表を与えるという經驗的作業を経た結果としてしか、超經驗的なものの概念は成立し得ないという逆説の絶えざる自覚がそれである。そしてこの逆説的な言語感覚の有無が、カントとアドルノの言表の差異を鮮明に際立たせているのではないだろうか。〈超經驗的領域を代理＝表象する經驗的認識〉という矛盾を、二元論の言語操作が担い、忘れさせる瞬間にのみ、カントのいう「矛盾を含まぬ」概念は思惟可能になる。実際のところアンチノミーは、可想界を「思惟」することでも少しも解消しているわけではなく、限界概念の個別的使用に絶えずつきまとつてゐる以上、この逆説を抹消することなく言語認識のマテリアルな機能ぶりを喚起し続けることが、アドルノの批判の課題であつたわけである。経験を超越した領域を「ポジティヴに」措定することができないという表現へのアドルノの執着は、まさにこうした彼の透徹した言語観から理解されるべきであろう。つまりこの表現は、超經驗的世界の表象がそのつどポジティヴな(＝人為的な)經驗的操作による矛盾の抹消の効果が過ぎず、超經驗的なものの直接的把握ではあり得ないのだという、カントには未だなかつた強固な警戒心を表しているのである。

更に、この逆説的言語観に着目することで、限界概念に対するアドルノの振舞い方は、相反する二つの位相によつ

特徴づけられる。その一つは、「無意識的なものの哲学」に代表される、超經驗的なものの不当な実体化に対して、内在的立場から徹底した禁止を訴えることである。ところが、限界概念のポジティブさの否定というこの要請によって内在的立場を貫徹しながら、他方で内在性を越えた領域を正当に志向してもいる点で、彼の立場は特異なものとなっている。つまり彼の思考は、可想界を含むありとあらゆる概念を個別的經驗に内在させながら、同時に、可想界そのものを（消し去るのではなく）純粹にネガティブな潜勢として限界概念の矛盾の中に保存し、その上でこの矛盾を名指す行為を通じて、不確定な領域へと新たに經驗を押し進めることを可能にしているのである。こうした仕方での批判を反復するプロセス自体が限界となる点で、アドルノの限界概念は、限界の〈徴表〉としてのカントのそれと、決定的に異なっている。約言するならば、限界概念に対するアドルノの批判においては、内在的立場からの超越化の全否定と、超越的なものの純粹にネガティブな確保とが、その都度力動的に接続されてゆくのである。それゆえ、意識經驗を進展させるその都度の媒介という意味でならば、諸々の限界概念は、むしろアドルノにおいても、カント同様に不可欠な機能を果たしていると見てよいだろう。

「超越論の心理学における無意識の概念」での考察の原理的基盤は、この逆説の動的探究に尽きているといっても過言ではない。のみならず、認識され得ないもののネガティブな力をその都度の言表の矛盾の内に保存しようとする論理は、アドルノが様々な術語を考案しながら生涯探究し続けた課題を早くも方向付けているのである。なるほど、こうしたダイナミックな論理を形成するにあたって、アドルノはコルネリウスの言う、意識經驗の〈連関〉と〈進展〉を巧みに援用したと見ることが出来る。しかし、そこに成立した認識論は、レーニンがマッハ主義の中に見たような経験一元論とは無縁のものであり、悪しき観念論であるどころか、むしろ唯物論的とさえ言える即物的言語認識批判によって観念論を絶え間なく破壊し得るほどのものであった。例えば、当のダイナミックな論理が「意識經驗の無限進展」といった凡庸なイメージへと再び平板化されることに對して、彼が最後まで警戒を怠っていない点は、注

目に値する。

内在的把握と超越的把握の矛盾が生じるのは、私が経験の進展の非限定性 *Unbegrenztheit* を、意識外部の或る原理的に不十分な原因からの帰結と解する場合である。この不十分な原因を推断すること、またその推断の含む矛盾は、しかしながら、単純な事象の帰結に過ぎない。つまり「そのとき」私は、経験の進展における無限界性 *Grenzlösigkeit* を、次のような仕方で誤解しているのである。その仕方とは、個々の事象を、つまりそれを認識してゆくために経験の進展にいかなるポジティブな限界も据えられないような個々の事象を、無限なもの *Unendlich* というポジティブな所与性と解釈してしまう、という仕方である。その認識が問題となっていている当の事象は、意識に内在した事象なのだから「それは誤解なのだ」。無意識を超越的に定めるといふことは、無限なもの *Positiv* な所与性を受け入れることで生じる矛盾を和らげる企てにはかならない。もちろん（既に見たように）そうした企ては常にアンチノミーの関係に至ることになるのであるが。(16)

経験的意識の進展に限界がないということ、意識が無限の事象を経験してゆくこととは一見同じことのように見えるが、ここではその両者が異なっているという認識が鍵となる。経験されてゆく事象を無限なものに見なすことは、経験を越えた領野に「無限なもの」といふ、それ自体ポジティブな観念を与えることに安住し得るのに対し、意識の進展に限界がないと自覚することは、「矛盾を和らげる」ことなく、進展する意識の側からその超越的外部を持統的に探究することを強いる。これら二つの手続きの差異を明確に念頭に置いていたがゆえに、アドルノはカント以降の「無意識的なもの哲学」を一括して斥け、一見非生産的とも見える頑迷さで、独断論的認識の「ポジティブな」言語化を否定し続けたのである。

四 批判的無意識概念を求めて

無意識概念の危険性を内在的立場から批判する際に、アドルノは無意識がポジティブではなく意識の否定としてのみ規定されることを要請していたが、論文の後半で彼は一転して、無意識概念を「ポジティブに規定する」ことを主張し始める。しかし、一見矛盾するこの二つの立場からの主張が不当な転向でなく、内在批判を貫きながら同時に内在一元論を避けるあの独特な態度の表れであることは、彼の論述を實際に参照すれば明白である。そこでは無意識概念は、無意識的なものとして意識されたものを具体的に否定してゆくプロセスの中で、「その都度」解明される連関の認識として求められているのであって、本来知り得ないものを直接掴み定めることといった意味で「ポジティブに」獲得されているわけでは決してないのである。したがって無意識概念は、無限界的に展開される限界概念の論理に則って正当に論じられることになる。⁽¹²⁾ その際アドルノは、物自体に模して、矛盾をはらんだ限界概念として、へ心的な物 *Seiendige* と呼ばれる概念を用いている。

我々が関わっている諸物は（心の概念についての綿密な批判的議論によるなら、それらはへ心的な物）と呼ばれるであろう）、決して客観的空間に属さない。たとえそれらの構成に視覚及び触覚的データが参与しているとしてもである。それらの物の内に含まれる予測の連関 *Erwartungszusammenhang* は、決して空間内の諸物相互の関係に関わるのではなく、体験相互の関係に関わるのである。（188）

へ心的な物〉が客観的空間に属さないのは、それらが各々の主観の過去の総体との関係性に起因するからである。言うまでもなくここで生かされているのは、「気付かれていない想起」が現在の意識に対して重要な影響を与えているとする、コルネリウスの「想起」説である。したがって、空間内に位置づけることはできないにもかかわらず実在するという、へ心的な物〉の一見奇妙な特性を理解するには、音楽におけるメロディの推移を用いた平易な解説を思い返すだけで十分であろう。空間的に定着、記述しうるのは、個々の体験要素のみであって、過去の全体との総合によって生み出されてゆく結合態は気付かれておらず、どこにも位置づけることはできないからである。経験的意識を超

越しているのでもなければ、日常意識に内属しているのでもないような無意識について語る余地は、この意識連関という相に着目することで、与えられる。こうして、無意識事象を探究する試みは、「想起」や「予測」のような心的活動の連関の中で「へ心的な物」を定着させてゆく連関の法則性を解明する企てに、重なるのである。

「想起」の具体例にメロディや詩が挙げられていたことから推測されるように、意識連関の統一は、進展による新たな経験の獲得と不可分である。「へ心的な物」が「超越的であるかのように解されるべきではない」(95) 一方で、客観的空間にも属し得ないとされるのも、心的なものがその都度確かに意識されながら、隠れた連関を現すことで、絶えず更新されてゆくはずだからである。紛れもなく「へ心的な物」は、個別的時点において否定されつつ、この否定を介して経験を進展させてゆく、あのアドルノ固有の限界として機能している。そしてここでも、アドルノの力動的な処理方法を何よりも明確に語っているのは、「ポジティヴでない」という語法の選択と、それによって無限界性を示唆する論法である。

個々の新たな体験は全て、「へ心的な物」の一つの新たな表れであって、これに新たな体験は属している。そして新たな体験は同時に、「へ心的な物」の新たな規定の可能性を与えるのである。(中略)「へ心的な物」を完全に規定する進展には、理論的にはいかなるポジティヴな限界も、措定されない。その結果、経験が進展するにつれて、「へ心的な物」には可能な限り、常に新たな特性が承認されることになる。(108)

こうしてアドルノは、コルネリウスの認識論的心理学が持つ力動性を実にスマートに取り込むことにより、無意識が超越的に実体化されることを避けつつ、他方で無意識や物自体のような不定の領域からの触発を経験批判流に排除してしまうことにも抵抗し得たのであった。そして彼は、このような手続きを経て精緻化された無意識概念が、フロイト精神分析のそれとも一致すると考えていた。というのも、フロイトの精神分析は、非独断的、内在的立場を守りながら、極めてダイナミックに無意識を探究する議論と目されるからである。

まず、精神分析の解釈によれば、あらゆる体験や現象は「意味」を持っている。この主張は、コルネリウス・アドルノの認識論で言えば、「我々の体験は全て、個人の意識統一の連関に属している」という命題に合致する。フロイトが子細に論じた夢や錯誤行為がそれまでほとんど注目されなかったのは、それらが単に偶然的で無意味なものと思われていたからであった。だがアドルノの立場からするなら、孤立した体験が無意味に見えるとしても、それらは「気付かれていない想起」や「予測」といった連関の中で確固たる位置価を持つはずであるから、意識連関の下で意味付け不可能な体験はあり得ない。そしてその場合の「意味」は経験的意識の外部から超越的に押しつけられるのではなしに、意識連関内部での事象の位置づけを解き明かすものとして与えられねばならない。この点においても、フロイトの理説はアドルノの批判を満足させるものであった。「フロイトの説明は、孤立させて自然主義的に実体化するのでなく、意識の「内在連関」についての陳述として理解されなければならない」(註)からである。しかも同時にフロイトの内在連関は、解釈の「進展」につれて常に新たな姿を現すダイナミズムを内包している。「心的な物」は、常に「気付かれていない想起」との相克の内において、この相克を様々な連関として理解させてゆくのであった。同様に、例えば「抑圧」や「検閲」のメカニズムにおいては、フロイトが心における「諸力のせめぎ合い *Kräftepiel*」と呼んだものがダイナミックに理論化されている。フロイトは言い間違い *Versprechen* について、それを偶然的なものとして切り捨てるのではなく、またその原因を外から押しつけるのではなく、経験的自我の意識の連関の中で言い間違いのメカニズムを探究しているが、アドルノはそうした錯誤行為の解釈に「心的な物」の変化についての法則性の認識を重ね合わせる(註)。特に、「何かをしようとする意図が現存するのにそれを禁圧してしまうことが、言い間違いの生じるための不可欠の条件である」といったフロイトの言葉にアドルノが共感しているのは、「禁圧」に含まれる離反こそ意識連関の「不可欠の条件」であるとするとフロイト理論の力動性が、限界概念のはらむ矛盾に認識を進展させる条件を見るアドルノの弁証法的批判に共鳴したためであろう。

しかしながら、カントが超越論的批判のバランスを失って可想的存在から静観的に陳述を展開してしまったように、フロイトにもまた、限界概念の両義性を忘れて、無意識のポジティヴな構成へと傾く瞬間があった。「持続的に無意識的なもの das dauernd Unbewusste」の構想がそれである。そして予想に違わず、アドルノはこの逸脱に対しても、カントの可想界を批判したときと同じ厳格さでもって、警戒を表明することになる。

この「へ心的な物」という話題は、認識論的な限界概念の樹立としてのみ、理解できる。つまり「心的な物は知り得ない」というポジティヴな発言すら既に、我々には禁じられているのである。かろうじて我々に許されているのは、心理的連関を我々が認識してゆく進展には、限界がないということについて語ることだ。ところがフロイトは、目下知られない特定の心理的連関を全く知られない連関とし、意識連関に対してへ超越的な連関にしてみようことで、誤りを犯した。持続的に無意識的なものという概念を不十分なかたちで用いた結果はこれのみである。(290)

精神分析の認識論的意義を承認したのと同じ論理でもって、フロイトの不十分さをも明らかにしようとするアドルノの一貫性は、我々がこれまでに繰り返し確認してきたものであるから、もはや改めて説明を加える必要はあるまい。カントを論じる場合でも、またフロイトを論じる場合でも、アドルノは、彼ら先駆者たちの反形而上学的批判の有効性を十分に認めながらも、批判の無限界性がなおざりにされる場面では、すなわち限界概念が固着されそうになる場面では、危険を確実に嗅ぎつけ、批判を再活性化しようとしたのであった。

結び 認識論としての社会批判に向けて

一切の認識はマテリアルな手続きに則っており、言語記号による媒介の上に立っているのであるから、思惟は媒介する言語と媒介された観念とのずれなしには成立し得ないということ。言語論として明確に論証されることこそなか

ったものの、この持続的意識から、彼は、限界概念を限界外部の透明な徴表とするのではなく、無限界的な批判の「その都度の」手がかりとしたのであった。⁽¹³⁾ (経験外部という) 表象内容と (経験内部における) 表象作用との矛盾によって進展するプロセスそのものが限界となつてゆくという、独特のダイナミズムも、この言語記号に対する終始一貫した、硬質な反省に立脚している。こうした言語認識のメカニズムは、完全に構造として理解されているがゆえに、カントとフロイトの批判に共通の視座を提供しうるものであったが、更には貨幣をめぐる経済学的考察や、社会表象をめぐる政治学的考察にも、十分応用可能なものであった。例えば経済活動は、「経済的プロセスからは独立した現実」(38) を売り物にすることによって、また「帝国主義的傾向は (ファシズムのイデオロギーにおいて明白であるように) 意識を離れた存在論的、超越的、そして何らかの仕方で神聖な本質へと連れ戻す」(39) ことによって、現実に対する批判的視座を回避している。アドルノがそれらを「無意識論のイデオロギー的役割」(318) として喝破したのは、言うまでもなく、そこに「無意識的なものの哲学」と同じ構造上の誤りが認められたためであり、言い換えれば、連関の内部と外部との矛盾を示す一点が、矛盾としてではなく特権的な記号として、無批判に固定されているためであった。もちろん、限界概念がへ無限界的な批判のその都度の対象として残り続けるように、こうしたイデオロギー的観念も完全に抹消されることはないであろう。だからこそアドルノは、最初期に形成されたこの批判のメカニズムを、思考の運動の中で生涯維持し、多様な領域で変奏し続けたのである。

超越論哲学とイデオロギー批判を外部から接続するのではなく、超越論的認識理論の内部からイデオロギー批判へとつながる道は、こうして拓かれたのであるが、しかしアドルノは、「精神分析の認識論的意義」を探究することを、これ以後は断念している。彼と精神分析との関わりは、アメリカ時代のプロジェクトでの実際の利用や、芸術論における否定的参照にとどまるようになる。また『否定弁証法』でのフェレンツィへの言及などから見ても、精神分析に対するアドルノの利用法は、認識論のための批判的原理から、社会文化的現象における心理分析の手段へと移ってい

ったようである。ところで一方、精神分析の側では、フロイト以降、言語論や認識論に寄与する動きを高め続けている。「超越論の心理学における無意識の概念」においてアドルノは、カント読解を出発点とする認識論的関心の下でフロイト精神分析を吟味し、更にそこで強化された方法論の内部から社会批判の可能性を示唆したのであるが、近年における精神分析の諸流派の内には、逆にフロイトの手法から認識論的方法論を精緻に展開し、哲学史の再評価やイデオロギー分析にまで至る原理的考察を模索するものが現れているのである。とりわけラカン派の諸理論は、経験的主体と象徴化とのダイナミックな関係、およびその構造に着目したイデオロギー批判という点で、最初期のアドルノと協約可能な数々の議論を整えつつあり、「学としての精神分析の認識論的基礎付けに至る」というアドルノの意志を貫徹している観すらある。こうした新たな視点から提出される言語と主体の構造論によって、我々の間に流布するアドルノ像を脱魔術化してゆく手続きは、今後のアドルノ研究が思想的に押し広げられて行く過程で有益なものとなるに違いない。本論は、そのための一部をなすことをも、目指すものであった。

註

- (1) Martin Jay, *The dialectical Imagination: a history of the Frankfurt School and the Institute of Social Research 1923-1950*. University of California Press, 1973, p. 87. (荒川幾男訳『弁証法的想像力』みすず書房、一九七五年、一二四頁)
- (2) Martin Jay, *Adorno*. Harvard University Press, 1984, p. 29. (木田元、村岡晋一訳『アドルノ』岩波書店、一九八七年、三二頁)
- (3) Hartmut Scheible, *Theodor W. Adorno*. Rowohlt (rowohlts monographie 400), 1989, S.44.
- (4) レーニン『唯物論と経験批判論』の中で、特に『哲学入門』(一九〇三)を引きながら、ユルネリウスの認識理論を批判してゐる。

(5) 『パリの生——ジャック・オフフェンバックと同時代のパリ——』『カリガリからヒトラーまで』等の著作で知られる批評家 S・クラカウアー（一八八九—一九六六）は、ヴィーゼンクルント家と交友があり、アドルノと共に週一度『純粹理性批判』を読んでいた。

(6) See Adorno, *Kants > Kritik der reinen Vernunft* in: *Theodor W. Adorno Nachgelassene Schriften* Bd. 4-1, S. 49.

(7) Adorno, „Der Begriff des Unbewußten in der transzendentalen Seelenlehre“ in: *Theodor W. Adorno Gesammelte Schriften* Bd.1, S.225. 以下、この論文からの引用は、括弧内に頁数のみを示す。なお、強調は全て引用者による。

(8) Hans Cornelius, *Einführung in die Philosophie*, B. G. Teubner, 1903, S. 304.

(9) 「超越論的心理学における無意識の概念」の中で、「独断論」「神秘論」「形而上学」といった語は、以下で明らかにされる誤謬を指すべく、ほぼ同義に用いられる。我々にとってとりわけ興味深いのは、同じ仕方で「存在論的な」誤りが指摘されていることである (S. 95, 156f, et passim)。無論、直接的にはこの語はライブニッツ・ヴォルフ学派に向けられたカントの批判を踏まえているのであるが、ここで練り上げられた批判の原理はそのまま、後にハイデガーの存在論を批判する際の論拠となる。つまり、ハイデガー批判の論点は既に『存在と時間』と同年の段階で準備されていたのであって、ナチズムをめぐるアドルノの実存的利害関心とハイデガーに対する彼の舌鋒とを暗黙の内に重ね合わせてしまう通俗的解釈は修正される必要があることとなる。確かにハイデガーをめぐるアドルノの論調には冷静さを欠いたところがあるにせよ、それはむしろアドルノが最初から指摘していた誤謬の危険性と不可避性とが、ハイデガー哲学においてあまりにも見事に体现されたためと見るべきかも知れない。なお、アドルノとハイデガーの認識・言語観の微妙な差異については、拙稿「分裂の言語」と「言語の分裂」——ハイデガー、ド・マン、アドルノ——（『研究紀要』第一六号、京都大学美学美術史学研究室、一九九五年）を参照された。

(10) Kant, *Kritik der reinen Vernunft* S. 66 (Ausgabe B). 以下、『純粹理性批判』からの引用は、K/V の略号と共に B 版の頁数のみを示す。

無限性と無限界性のあいだ

(11) アドルノは晩年に至るまで、「可想的存在」の概念に対する不満を持ち続けたが、その不満の根拠は、二〇年代から一貫して維持された問題であったわけである。またそれゆえ、『否定弁証法』におけるカントへの論難は「自由」や「自発性」等の概念に向けられてはいるものの、その問題性は『実践理性批判』よりもむしろ『純粹理性批判』に基盤をもっており、実践理性についての彼らの立場の埋め合わせがたいギャップは、限界概念をめぐる認識論上のスタンスの相違から必然的に帰結するものと言えよう。

(12) ちなみに、経験を越えた意識としての無意識など存在しないという根拠から、超経験的なものの心理学を取り下げようとしたのは、アドルノではなくカントであった。カントは、「およそ経験に関わりなく、一切の思惟に伴う限りの自我 Ich」という概念から推論されるものだけを知らうとする」(KrV400)心理学を、経験的心理学から区別して、合理的心理学 *rationale Seelenlehre* (あるいは超越論的心理学)と呼ぶ。そしてこれを吟味した結果、「合理的心理学は全く誤解から生じたもので」(KrV421)あり、〈誤謬推理 *Paralogismus*〉に拠っていると断じている。なぜなら、経験的要素を一切排した「思惟する私」は全く未規定であるはずなのに、合理的心理学はそれを自我という実在的存在にすり替え、「自我自身の内にある実体的なものを超越論的主体として認識していると信じる」(KrV422)からである。カントのこのような批判は、感性的存在を「制限する」だけのものとしての可想的存在という論理に、完全に沿っていると見てよい。ところがアドルノは、一見彼の立場とも合致するこの批判に対して異議を唱えており、そこでは限界概念をめぐるアドルノとカントの厳格さは、先の可想的存在の場合とは逆転している。もちろん、合理的心理学へのカントの批判を再考する際にアドルノが考えていたのは、無意識の独断論を否定する手続きはもちろん不可欠であるにせよ、それだけでは不十分なのであって、否定を介して進展してゆく意識経験のダイナミズムの中で改めて無意識を論ずる必要があるということであった。

(13) アドルノ自身は「記号」よりもむしろ「象徴 *Symbol*」という語を用いる。例えば、無意識を認識する課題は象徴論 *Sym-bolik* の明確化にあるとされ、超越的な対象のポジティブな設定は、しばしば「象徴を介さず」に「対象を把握すること」と言い換えられている。この観点から、ベルクソンの直観概念は「象徴を介してでなく無媒介に与えられる」(Sd)として批判されており、無意識的事実内容の間接性も「象徴を通じて与えられる」(ebd.)ものと説明される。したがってアドルノの批判的

警戒心が中断されることがなかったのは、彼が、一切の認識を象徴化の産物と見なしており、認識がその対象を直接手にするという錯覚をいかなるときも信じていることがなかったため、とも言い換えられる。

（筆者 にし・きんや 京都大学大学院文学研究科〔美学美術史学〕研修員）

des approches qu'elle propose.

Negating the Positive on the Border: Early Adorno's Integration of Psychoanalysis with Epistemology

by Kin-ya NISHI

Doctoral candidate

in the Department of Aesthetics
and Art History

Graduate School of Letters
Kyoto University

Though it has engaged little attention, T. W. Adorno's unsuccessful dissertation of 1927 entitled 'The Concept of the Unconscious in the Transcendental Theory of Mind' can be read as the first explicit expression of his epistemological methodology. In this lengthy paper, Adorno struggled not only to relate the transcendental theory of Kant to the psychoanalysis of Sigmund Freud, but to elaborate the notion of the unconscious as "boundary notion (*Grenzbegriff*)", one of the most subversive conception for his long term theory-practice. Such boundary notions as the unconscious and the thing-in-itself in Kantian philosophy, Adorno argues, should prove in themselves the existence of a split between their implication (that is, the field *beyond* the border of consciousness, experience etc.) and the fact that such notions can exist exclusively *within* the border of the consciousness, experience, and so on. The cognizance of this antinomical contradiction in boundary notions required him a twofold reflection: on the one hand, the delusion of the barely transcendent has to be dispelled through a non-metaphysical exploration; on the other hand, he has to avoid forging a sort of monistic empiricism. And this dilemma can only be resolved in a theoretical practice of resetting the boundary of our notional recognition forward. This is why Adorno, in his later career, continuously negated

the positive use of boundary notions (say, Heidegger's "being") so that the potential of the negative could be kept solely in the contradiction of words, and made us realize that every human knowledge, even about the transcendent, is based on a material procedure (=language). My essay attempts to analyze how he managed to transform both Kantian theory and Freudian psychoanalysis into this kind of uniquely materialist epistemology in terms of his paradoxical understanding of language.

Parfit's Defence of Utilitarianism : A New Look from the Theory on Person and Personal Identity

by Mariko OKUNO
Research Fellow
of the Japan Society
for the Promotion of Science

This paper deals with Derek Parfit's theory of personal identity, and with its bearing on utilitarianism. He is known as a 'defender' of utilitarianism, but we must ascertain *in which sense* he is so, and *how* we, following him, can defend utilitarianism.

Utilitarianism has often been criticized that it does not take seriously the distinction between persons. For example, Rawls and Nozick criticized utilitarianism precisely on that ground, and Williams attacked utilitarianism by saying that it neglects the integrity of a person. But what is a person? What does 'personal identity' mean? In order to give a satisfactory reply to these criticisms, one must look to the theory of persons and personal identity. Hence, we begin by expounding Parfit's arguments on these topics in his *Reasons and Persons* (Part Three).

First, introducing the concepts of person and personal identity, Parfit proposes two kinds of criteria for personal identity, i. e. the Physical and the Psychological. Then, he contrasts two views on the nature of a person,